Ⅱ　実　　践

＜実践例　１＞　第１学年　　平成３０年１１月　　（多　田　　渉）

１．　題　材　　蒙古襲来絵詞を読む　～歴史資料を読むときの留意点を感じ取る～

２．　本時の目標

（１）歴史資料を読み取る際、細部に注目し事実を捉えることや、その作成目的や作成者を踏まえて読み取ることの重要性を「蒙古襲来絵詞」の特性から指摘することができる。
（知識及び技能）

（２）絵画史料を意欲的に読み取ろうとするとともに、歴史資料を読むときの留意点を今後の学習に活かそうとしている。　（学びに向かう力、人間性等）

３．指導にあたって

（１）生徒観

社会科では、「社会的事象を多角的に捉え、民主主義を尊重し、より良い社会を求めて、公正に意思決定できる生徒」の育成を目指して授業に取り組んできた。第１学年の生徒たちは教科で育てる資質・能力のうち「扱う問題に対する見方が自分と異なる人々の意見に共感できる」を意識した学習として、ヨーロッパ州の単元において、「EU からの脱退に賛成か反対か」という単元課題の下、EU からの脱退を選択したイギリスの現状を踏まえて学年全体で投票活動を行なった。残留か脱退かを話し合う過程において年代や家庭や企業といった様々な立場から多角的に問題を考える様子が見られた。学年全体での結果は残留５５%、脱退が４５%と僅差になり、様々な立場を踏まえることや課題に対する個々の考えが異なることを経験することができた。

一方で「問題に関連する情報を選び出し、提案された解決策と論理的に結びつけることができる。それらの情報の信頼性を判定できる」に関する学習では、アジア州の単元において「中国、マレーシア、インド、アラブ首長国連邦から転勤する場所を選ぼう」という単元課題を設け学習を進めた。その中で気候、産業、宗教、経済、環境問題などを踏まえて三角ロジック（主張と根拠と理由付け）を利用し、論理的に主張を構築することを経験した。しかしながら、主張を導き出す過程の中で根拠となる情報の信頼性にまで思考が及ぶことはなかった。

また、歴史の授業において「粉河寺縁起絵巻」「春日権現体験記」「平治物語絵巻」の絵画史料を扱った際、武士の服装の違いや武器を持っていることに気づくことはできているが、それは生徒の既存の知識を確認しているに過ぎず、細部に注目して新たな気づきを獲得する姿は見られなかった。

これらのことから、情報が溢れる現代社会の中を生きていく生徒たちに対し、情報をより精緻に読み取ろうとする意識を持って、クリティカルに捉えるとともに、情報の信頼性を判定する力をつけていく必要があると考えた。

（２）教材観

「蒙古襲来絵詞」は１３世紀後半の元寇の様子を記した絵画史料である。上巻は２３メートル、下巻は１９メートルにも及ぶ。元軍との合戦に参加した竹崎季長の依頼により制作されたもので、合戦の当事者の声が反映されている良質な歴史資料として歴史的価値も高く、様々な教科書にも採択されている。「蒙古襲来絵詞」からは元軍が使用した武器や日本の御家人が一騎打ちで戦いに臨んでいたことなど、当時の合戦の様子が読み取りやすい。そのため小学校の学習でも取り扱われることが非常に多い絵画史料となっている。

生徒へレディネステストを行なったところ、馴染みがある歴史資料だけに、事前の知識量がかなり多かった。「蒙古襲来絵詞」という歴史資料を読むための素地となる知識は小学校段階から身についている。

しかしながら、生徒が目することの多い「蒙古襲来絵詞」は元軍の兵士が３人、馬に乗り戦いを挑む竹崎季長といった構図の一場面が切り取られたものである。実際には、それ以外の部分に、元軍の人員構成や様々な御家人、竹崎季長が恩賞をもらう姿などが描かれており、内容が多岐に渡る。生徒が目にする機会の少なかった場面からも当時の様子を豊富に読み取ることができる。

また、竹崎季長が功績を後世に語り継ぐために制作させたものとされているため、竹崎季長の視点で描かれており、元寇という歴史的な事象がそのまま反映されているわけではない。さらに、元軍との合戦を正確に描いたものとも言い切れず、作成者の意図が濃く反映された部分もある。

これらのことから絵画史料として「蒙古襲来絵詞」を取り上げることは、細部を精緻に読み取り、クリティカルな視点から資料の信頼性を判定することに適した教材である。

（３）指導観　～目指す生徒の姿に近づけるために～

本時における、資質・能力を発揮している生徒の姿を、以下のように考えている。

既存の知識を活かして、絵画史料を精緻に読み取るとともに、歴史資料の作成目的や作成者を踏まえて描写の意図を指摘することができる。

①本時でつけさせたい資質・能力

本時では、特に全教科共通で重視している資質・能力の「場に応じて判断基準をつくる力」に関わって、教科で育てる資質・能力の「問題に関連する情報を選び出し、提案された解決策と論理的に結び付けることができる。それらの情報の信頼性を判定できる」の育成を意識して指導に当たっていく。

本時の初めに、「小学校で学習した元寇の学びを確かめよう」という学習課題を提示し、「蒙古襲来絵詞」から既存の知識は絵画史料のどこに描かれているかを読み取らせる。既存の知識が絵画史料のどの箇所から言えるのかを指摘させることで、絵画史料を精緻に読み取った結果を意識させていく。また、絵画史料を精緻に読み取る過程で、既存の知識と絵画史料との差異、既存の知識にはない新たな発見等にも気づかせる。なぜ既存の知識や教科書の記述と異なっているのか、「蒙古襲来絵詞」の描写や既存の知識は信頼できる情報なのか、作成者はどのような指示を受けて描いたのかというところに思考が及ぶようにしていきたい。

本時の学習を経ることで、今後の学習で必然的に触れていく様々な資料に直面したとき、資料活用の技能としてクリティカルに捉える技能を汎用的に使うことができるようになると考える。

②手立て

①で示した資質・能力を育むための方法を以下に示す。

・諸資料を読み取る際には、的確に情報を選びだすために視点を持つことが必要となってくる。絵画史料を読み取るに当たって、過去の同じような場面の絵画史料を用いて、比較させ変化を読み取らせる方法などが考えられる。本時の学習では、視点を定める方法として既存の知識を活用したい。生徒のレディネステストで把握した既存の知識の中には定説と異なる知識も見受けられたが既存の知識や資料をクリティカルに捉えるための視点としてそのまま生徒に周知する。さらに、既存の知識という視点を焦点化できるように「よく見てみると」という一文を入れた学習プリントを作成し、資料に描かれたものをピンポイントに読み取らせていく。

・既存の知識で挙げられた内容が、なぜ資料中に描かれていないのか、その理由を指摘することで歴史資料を読むときの留意点に至るようにする。また、歴史の事実を構築するためには他にどんな資料が必要かを考えさせることで、一つの資料だけで事実を判断しないということに気付かせていきたい。

・本時の終末に振り返りの時間を設ける。振り返りの際には、資料を読み取るにあたり、気を付けることやわかったことを視点として記述させる。振り返りの記入により、自己の学びを実感させたい。

４．本時の評価規準

知識及び技能	学びに向かう力、人間性等
歴史資料を読み取る際、細部に注目し事実を捉えることや、その作成目的や作成者を踏まえて読み取ることの重要性を「蒙古襲来絵詞」の特性から指摘している。	絵画史料を意欲的に読み取ろうとするとともに、歴史資料を読むときの留意点を今後の学習に活かそうとしている。

５．本時の学習活動

（１）目　標

①歴史資料を読み取る際、細部に注目し事実を捉えることや、その作成目的や作成者を踏まえて読み取ることの重要性を「蒙古襲来絵詞」の特性から指摘することができる。

②絵画史料を意欲的に読み取ろうとするとともに、歴史資料を読むときの留意点を今後の学習に活かそうとしている。

（２）展　開

学習活動【学習形態】	目指す生徒の姿	教師の手立て
１．蒙古襲来絵詞に関する既存の知識を確認し、学習の見通しを持つ。【全体】	・小学校での既習事項や既存の知識を想起し、共有している。	・パワーポイントを用いて蒙古襲来絵詞の全体やレディネステストの結果を提示する。
小学校で学習した元寇の学びを確かめてみよう。		
２．知っている通りだと思う箇所には青付箋、疑問に思う箇所には赤付箋を貼る。【個・全体】	★既存の知識と歴史資料を重ね合わせ、資料を読み取っている。	・既存の知識と新たに気づいたことの区別をつけやすくするために、レディネスの結果を提示する。 ・蒙古襲来絵詞の絵画部分を印刷したものを用意し、生徒が自由に資料を閲覧できるようにする。
＜重点を置いた社会科の資質・能力を発揮している姿＞ ★既存の知識を活かして、絵画史料を精緻に読み取るとともに、歴史資料の作成目的や作成者を踏まえて描写の意図を指摘することができる。 例）神風が吹いたと学習したが、絵画史料には神風について描かれていない。竹崎季長の功績を後世に残すための史料だから必要なかったのではないか？		
３．疑問に思う箇所を取り上げ、その理由を考える。【個・全体】	★疑問に思う箇所の描写の理由を考えている。	★作成者の意図が色濃く反映されているものを取り上げる。
４．本時の振り返りを行う。【個・全体】	★絵画史料を読み取る際の留意点について記述している。	★史料読み取りの留意点を確認するために、てつはうを例に挙げ描かれ方の意図を全体に問う。

（３）評価とその方法

絵画史料に見られる描写の理由を考察し、歴史資料を読み取る際の留意点を指摘することができているかを発表内容や学習プリントの記述から評価する。

６．授業を終えて

実践を通しての成果（○）と課題（▲）は以下の通りである。

○「蒙古襲来絵詞」という見慣れた題材を使うことで小学校と中学校の学びをつなげて考えることができていた様子が見られた。既存の知識と資料を照らし合わせることで認識の変化が生じ、自己の変容に気付く生徒が多く見られた。

・自分の知識をそのまま押し通さず、一度立ち止まって視野を広く保つことが大切だなと思いました。
・自分が思っていたこと、知っていたこととは矛盾していることに目を向けることが大切だと感じた。
・自分が知っている知識と重ねて、おかしいと思うところが見つかった。疑問を持って資料を見るようにしたい。

○自らの疑問を解決していく形で授業を進めることで、多様な気付きを引き出すことができた。授業の終末には「この資料は何のために作られたものなのか」という疑問も生まれ、生徒一人一人が自分の課題として題材に向かっていた。

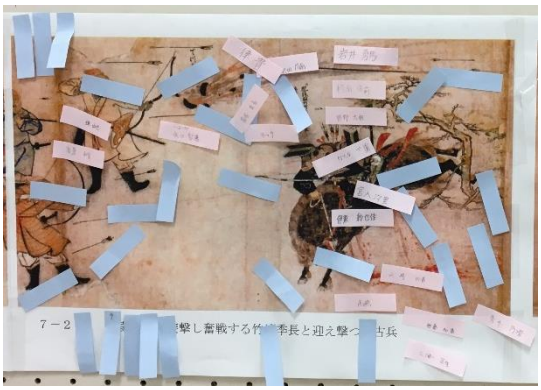
・資料を見るときは内容も大事だが、「誰が？」「何のために？」などの目的を知ることが大事だと思った。

○実際の資料に向き合う時間や思考する時間を確保することで、資料を読み取る視点について、多角的に読み取る必要性やクリティカルな視点を持つ必要性について、実感を伴って気がつく生徒が多く見られた。

・資料は何かしらの理由があって作られているものなので、作成者の思いや願いが混じり、事実があやふやになってしまっている部分がある。だから描かれているものをそのまま受け入れてしまうことは良くないと感じた。
・このような資料は実際に知っている人がいないから謎めいている。歴史上の事実は想像の中から生まれている。

▲探究型学習としての実践だったが、本時の目標を２つの観点で設定していた。しかし、本時の授業は生徒の様子を見ると「思考・判断・表現」を活用していた授業であった。目標の中に「思考・判断・表現」を設定し、評価規準を明確にしていく必要があった。

▲学習課題を「小学校で学習した元寇の学びを確かめよう」と設定していたが、生徒が目指す姿と若干異なるところがあった。「歴史学者になって歴史を読み解こう」などの課題設定の方が適切であった。



赤の付箋が貼ってあるところは生徒が既存の知識と比べて疑問を感じた部分。
・暴風雨が来たのに描かれていない
・てつはうの爆発が不自然